

日本キリスト教会

## 府中中河原教会云月報

二〇二〇年八月二日

### 「苦しみのただ中から輝く栄光」

牧師 大石周平

「イエスは近づき、彼らに手を触れて言われた。『起きなさい。恐れる』ことはない。』」  
…(マタイによる福音書一七章一〜八節)

マタイによる福音書の連続講解を続けています。今月には一七章に入りますが、そこではキリストの「山上の変貌」の場面を軸に、ガリラヤ宣教からエルサレムに向かう受難の旅への転換がなされます。

この先に進むにあたり、主は近い弟子たちと共に「高山」(一節)に登られます。そこから「一同が山を下りる」(九節)までの枠組の中で起こった出来事は幻のようで、走馬灯よろしくあらゆる過去が流れ込んだかと思えば、同時に明日や終わりのヴィジョンがひらめくようです——まるでSF映画の「時のフォール

ド」、すなわち、過去と未来が現代の一点に折り重なる状態——。この場面はそれゆえ靈気楼のように美しく、同時に掴みがたい印象を残します。変貌のキリストにまみえることは、来し方も行く末も共に見通す天の父の御心の深さ・高さ・長さ・広さに向き合うことに等しい。この幻に触れるとき、御旨の真意が計り知れず、恐ろしくさえあることがよく分かります。突然に、メシアは白輝の衣を帯び、モーセやエリヤと語り始めておられました。ペトロは麗しい幻視の前に、荒野礼拝の伝承を思ったか、おもむろに天の参謀会議に割り込むと、「仮小屋(＝幕屋)を三つ建てる」と申し出ました(四節)。たしかに、モーセの名と「山」や「輝く顔」の表象は、ユダヤ人が仮庵祭で記念する出エジプトを思わせます。「輝く衣」は天使か預言者の外套のようで、力強くも思われたいでしょう。主に向かい「あなたはメシア、生ける神の子」と告白したユダヤ人ペトロらしい、率直な記念礼拝の申し出です。ただし、ペトロは本当に正しく理解していたのでしょうか。その礼拝は、闘うことなく戦勝記念碑を建てて行う「お祭」に

なりはしないでしょうか。ペトロは今見た幻を地に留め置こうとしましたが、この先の十字架に至る受難の告知を聴いた後でも、この光と結びつけることができいていません。天の栄光が、地上におけるメシアの苦しみや死と結びついていなかったのです。今は山に留まる時ではなく、山を下り、苦難のくびきを負う時であるのに。弟子たちもまた、「自分を棄て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」(一六・二四)と呼ばわるイエスの御言葉にこそ聞き従うべき時であるのに！

マタイによる福音書のペトロはいつでも、後の教会の姿を代表しています。私たちもまた、十字架なしの礼拝をして、靈気楼をつかむような身振りで光を引き留めようとしてはこなかったでしょうか。礼拝後の「六日の後」(一七・一)に振り返ってみて、いかがでしょうか。イエスの苦しみを思い、「わたしのために命を失う者は、それを得る」(一六・二五)と言われた主の御言葉に問われつつの生を、私たちは信実生きてきたでしょうか。

前一六章のイエスは、教会の岩と呼ばれた告白者の小信仰を見透「↓次頁に続く」

「↓前頁の続き」かすと「退け、サタン」と叫ばれ、「父の栄光」は「十字架」の痛みと病苦と死と滅びの中からこそ輝くことを告げられました(二二〜二七節)。一七章では叱責こそないものの、幻視を記念する仮庵建設の提案は流れます。かわりに、そのとき以下の天来の言葉が響き渡るのです。

「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け。」(五節)

そう、「山上の変貌」を正しく理解するには、天を仰いで「見る」栄光のヴィジョンが、地に足をつけて「聞く(＝聴き従う)」十字架の言葉と、結びつく必要があります。

同じ御言葉が、詩編の詩人やイザヤ等の預言者を通してすでに伝えられていたことを思い出します。前者(詩二)は神の子の王的支配、後者(マタ二・一八―イザ四二)の苦難の(僕の歌)はメシアの苦しみへの従順の中で示された神の義と関係がありました――「なによりもまず神の国と神の義を求めなさい」との山上の教えが思い出されます(マタ六・三三)――。しかし何よりこの御言葉は、イエスがガリラヤ湖での洗礼時に聞かれた、天来の召しと約束の言葉でした。あるとき、鳩のような霊とともに、神の国と義を

めぐる聖書の約束は、そのことごとくがイエスの内に流れ入ったのです。受洗日に、そしてこの生の転機に聞いた天来の言葉は、イエスの地上での歩みを、御国の宣教と神の義の成就のための死へと、方向付ける言葉です。メシアの苦難を経て、ただ十字架をとおしてのみ勝ち取られる命の輝きをこそ、山上の光は指し示していたのです。

父の栄光とメシアの苦難の接点、ここにこそ、恐るべき神の御心が示されます。私たちは弟子たちと共に、幻視にまして恐ろしい神の言葉の現臨に、恐れおののきます。しかし、ここにこそ、まことの礼拝の萌芽があります。御言葉におののき伏す者に、「イエスは近づき、彼らに手を触れて言われた」のです。

「起きなさい。恐れることはない」(七)。  
ああ、本当に聞くべきはこの言葉でした。気づけば幻は見えなくなり、ただお独り、苦難のメシアの御姿を彷彿とさせる、人の子イエスだけが立つておられます。そう、「ほかにほだれもいなかった」(八)。不安を取り除くのは、この方以外にない、ということですから。私たちのために苦しみを受け、十字架を負い、それぞれの軛を全く軽いものにするために下山し、エルサレムへの道へ歩み出す、

メシアの自覚を新たにされた人の子以外には！「恐れるな」という言葉をめぐる旧約伝承(たとえばダニエル八・一八、一〇・一〇)と共に、ガリラヤ宣教中にイエスご自身がこの言葉を発しておられたこと……そのすべてが再び、一言の内にフォルドされた状態で示されます。過去だけではありません。イエスの言葉には、私たちには計り知れない義とさばきの神の御前にあつても不安に打ちひしがれることなく、新しい命の輝きのうちに心高く歩む群れのたつ、復活と命の日々のヴィジョンすら含められているかのようです。

いずれ弟子たちは、もう一度イエスに従いガリラヤの「山」に登って御前にひれ伏すことになるでしょう(二八・一六)。そのとき、イエスは十字架と復活の主としての栄光を示しつつ、「天と地の一切の権能」を授かる主として、父・子・聖霊の三つの位格をもった名を記念する受洗者の礼拝に、すべての者を招かれます。そこで、イエスが恐れを締め出しつつ、「世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と約束される宣教共同体がたつのです。洗礼時の召しを思い、主の担われた十字架の栄光に立ち帰って、慰めと励ましに満ちた御言葉に聞き従って参りましょう。

## 「コロナ禍の

### 「オープンチャーチ2020」(予告)

牧師 大石周平

会堂建築五周年記念のペンテコステ礼拝を、私たちは、オンラインで共に祝いました。参集できない欠けを覚えながらも、なお私たちは引き離された状況の中にあっても共なる礼拝者であり、同じ霊に結び合わされた共同体の一員であることを確認しました。この間に、普段から同じ場所での礼拝が難しい状況下にある兄弟姉妹とも手紙を交わし、電話をし、新しい技術を学んでビデオ通話を通して対面し、互いのために祈ることが増えました。小会の働きはなお欠け多きものですが、「コロナ禍にあつて私たちは、「日常」を変えられる経験を前向きに受け止める契機を与えられているのではないのでしょうか。

「ソーシャル・ディスタンス」を求められる時にあつて、かえつて深い交わりを深め、共同性を実現することのできる前提と実質を、教会は与えられています。旧約時代以降の「ディアスポラ(離散)」の民が、さまよいながら天を仰ぎつつ求めた地上での礼拝について、私たちは、現況と重ねて学びなおしていま

す。主は、「異邦」にあつても、祈る者たちと共におられ、主と結びつく者たちの一致を実現してください。使徒パウロは、主が、神からもつとも遠く離れたと言わざるをえない「罪人のかしら」さえ贖い、救つてくださったと語り、教会から物理的に引き離された日々にあつて、隔離された監獄をも喜びに満ちた小教会にかえました。福音書記者マタイは、大人数の集会を想定する状況にない群れを覚えつつ、二人または三人が共にいるときに、主がその只中に共におられると約束してくださいました。同じくルカは、とりわけ社会的に虐げられた人々を貧しさや病や疎外の現実から救いだされたイエスの時に続いて、霊に満たされた使徒たちの旅を記録しつつ、隔てを越えた共同体建設の時代の到来を告げました。ヨハネが伝えるイエスという「ぶどうの木」等のメタファーは、有機的な繋がりを前提していますが、同時に、見えない聖餐共同体の主との神秘的な結合を信じるよううながします。

私たちは、「コロナ禍」にあつて、聖書の伝える共同性に立ち、ひとつの場所に集まる交わりの意味を再確認しつつも、建物の境界を越えた共同体形成に仕えて参りたいと願います。そのために今必要なことは、私たちの生活領域である「家」や「地域」についても問い直しつつ新しい「共同性」に生きること。これまで私たちが意識するにせよしないにせよ引いて来た血肉や土地や思想信条や財産などの「境界線」を問い直しつつ、教会が府中の地に建てられていることの意味、皆様の多くが東京西の多摩地区を中心に生活圏を置いている意味を考え、同時に地域性を越える時代の普遍的課題に肉薄したいのです。

会堂建築と共に五周年を迎える「オープンチャーチ」を、今年、「地域」を主題に、オンラインで開催したいと思えます。ゲストに、府中で子ども食堂やフードパントリー(食材おすそわけの会)の活動に尽力してこられた「ごども」の居場所作り@府中「代表の南澤かおりさんを迎え、同団体の皆様との出会いを喜びながら、具体的に地域に根差したお話をうかがいたいと思います。既にパントリーのために会堂を二度使っていたいただき、協働の契機があります。日程は一〇月を予定。確定したらお知らせしますので、ディスタンスの時代に新しい出会いが待っていることを喜んで、技術格差を是正し備えつつ、参加の輪を広げてくださると幸いです。